

明治史料館通信



3. 愛鷹牧畜会社の牧場「山居」(宮本)



1. 江原素六の「牛牧」土塁(東熊堂字松沢)

1. 江原素六がつくった牧場の土塁跡。地元ではその周辺を「牛牧」と通称する。約12町歩の牧場は東熊堂から岡宮にまたがり、高さ6尺の土塁がその四方にめぐらされていたが、写真はその西辺の一部。
2. 東沢田村の土着土族の結社混同農社が、緬羊を放牧した場所。土着地笹見窪に隣接する。
3. 中世の山岳信仰の寺院だとか、豊臣家の残党の砦だとか、隠れキリシタンの教会だとか言われ、現在も謎の遺跡である「山居」は、愛鷹牧畜会社によって牧場として利用された。



2. 混同農社の「緬羊牧」土塁(東沢田)

土族授産の一環として江原が牧畜に乗り出すのは、廃藩後の明治五年(一八七二)である。駿東郡元長窪・北小林・岡一色・東沢田村、富士郡万野原新田に土着した旧幕臣二百五十人を対象に県から借りた一万四千円を資金として、牧牛社・混同農社といった結社をつくらせ、牧牛・牧羊を行った。ま

愛鷹山を放牧場に利用すること自体は、既に静岡藩時代に、軍事掛の幹部としての立場から旧幕府の愛鷹馬牧を引き継いで管理を行っていた関係上、当然考えていたのである。また沼津兵学校での同僚赤松則良がオランダから持ち帰った牧牛に関する洋書を見る機会もあったという。

明治四年(一八七一)の海外視察の体験は、帰国後の江原素六の行動に大きな影響を与えた。アメリカでの見聞は、工業よりも農業のほうに強い印象を与えたのかもしれない。彼が行った牧畜業は明らかに西洋式のそれを取り入れようというものだった。

江原素六と牧畜

江原素六とその周辺 (1)

結社名	牧主・中心人物	場所	着手年月	家畜種類
牧牛社	元長窪村土着士族	駿東郡元長窪村	明治5年10月	乳用牛
混同農社	東沢田村土着士族	駿東郡東沢田村笹見窪	明治5年末	緬羊・豚・牛
	江原素六	駿東郡東熊堂村	明治7年5月	牛・羊
牧羊社	森田留蔵	田方郡韮山町・桑原村	明治13年4月	緬羊
桂谷牧畜社	山口活平	君沢郡修善寺村	明治13年7月	肉乳用牛・乗用馬
産馬会社	仁田大八郎・川口秋平・田中鳥雄	田方郡丹那村	明治14年4月	肉乳用牛・乗搬用馬
牧馬場	海瀬八十吉・同源兵衛・同勇太郎	君沢郡河内村	明治14年5月	乗用・農耕馬
豊牧舎	花島兵右衛門	田方郡三島町	明治20年	乳用牛
愛鷹牧畜会社	永井嘉六郎・岡田金吾・森藤七郎	駿東郡	明治23年	牛・馬
浜村育牛場	浜村理平	君沢郡北江間村	?	牛・馬・羊・豚

明治前期東駿・北豆主要牧畜結社

『明治初期静岡県史料』第二巻、『静岡県田方郡誌』、『沼津市誌』中巻などより



明治4年の江原素六

六ヶ村連合会を結成し、
 拝借地の植林・牧畜事業
 に取り組みことになり、
 江原はその総理に選挙さ
 れた。総理として愛鷹山
 牧場の経営にあたる彼の

た沼津宿に牛乳売捌所を
 設置し、バターやフート
 メルキも製造・販売した
 という。
 この事業にあたっては、
 米人アブ・ジョンズ、津
 田仙、前田留吉など中央
 の人物から協力を得てい
 る。D・W・アブ・ジョ
 ンズは、明治八年（一八
 七五）から十二年（一八
 七九）まで内務省勸業寮
 の御雇い外国人として下
 総御料牧場で牧羊を指導
 した人。津田梅子の父と
 して知られる津田仙は、
 学農社を設立し西洋農法
 の普及に尽くした人。前
 田留吉は、文久三年（一
 八六三）、オランダ人から
 技術を修得し、横浜に日

本最初の搾乳所を開き、のち東京
 で牧場・牛乳店を開業した人。江
 原は、アブ・ジョンズに牧場用地
 を調査してもらい、津田には横浜
 から洋牛を運搬してもらい、前田
 には搾乳・製乳の技術を社員に伝
 習してもらったという。
 しかし士族による牧畜は明治十
 年までにはほとんど失敗に帰し、
 その莫大な負債が後々まで江原を
 苦しめたことは諸書に詳しい。牧
 牛社は明治十八年（一八八五）の
 解散まで瀕死の状態が続く。江原
 は明治十年以降は積信社による製
 茶輸出事業のほうへ力を注ぐこと
 になったが、牧畜と縁が切れてし
 まったわけではなかった。

明治八年官林に編入された愛鷹
 山入会地は、地元農民の運動によ
 り江原が中央工作を行い、十六年
 に無料貸渡の許可が下りた。関係
 町村は原宿外五ヶ町四拾
 六ヶ村連合会を結成し、
 拝借地の植林・牧畜事業
 に取り組みことになり、
 江原はその総理に選挙さ
 れた。総理として愛鷹山
 牧場の経営にあたる彼の
 動向は、連日のように「終日牧場」
 と記された当時の日記に伺い知る
 ことができる。二十三年（一八九
 ○）牧場の業務は連合会から愛鷹
 牧畜会社が担当することとなり、
 江原はその顧問に退いた。
 愛鷹牧畜会社は、山居（鷹根村）
 梅ノ木沢（長泉村）・一枚野（浮
 島村）の三ヶ所で牧場を運営した
 が、二十六年（一八九三）解散し
 た。牧場は、原宿外五ヶ町四拾六
 ヶ村連合会の後身原町外十ヶ町村
 組合に移管されたが、最後の社長
 森藤七郎・理事荏原正明（元長窪
 土着士族で静岡藩では長窪蚕業所
 養蚕織物取扱出役）が残務委員と
 してその後も運営を継続した。し
 かし三十二年に拝借地が払下にな
 ったことにより、三十四年（一九
 ○一）遂に廃牧となったのである。
 〔参考〕『江原素六先生伝』、大
 野虎雄「沢田学校所の由来と混同
 農社の事業」、「元長窪土着士族の
 事業」、『静岡県郷土研究』16・18、
 『下総御料牧場沿革誌』、三好信
 浩『日本教育の開国』、田村栄太
 郎『日本の産業指導者』、『愛鷹
 山組合沿革史』、『金岡村誌』。

シリーズ

沼津兵学校とその人材

19

沼津兵学校と共立学舎

沼津兵学校が教科書として刊行

したいいわゆる「沼津版」のひとつに『智環啓蒙』がある。これは、一八五六年に中国人用の英語テキストとして香港で出版された英人レッグの著書を原本としている。

同書は沼津兵学校以外にも、鹿児島藩・石川県学校・攻玉塾・広島洋学所・柳川春三・瓜生寅などが翻刻・出版している。

ところで、この沼津（兵）学校刊行の『智環啓蒙』には、二種類が存在する。下の写真がそれで、いずれも当館所蔵である。①は、『筆算訓蒙』『兵学程式』『仏蘭西歩兵程式』『野戦要務』などの他の「沼津版」と同様、見開きに「徳川氏改印」の朱印が押され、奥付には「売捌蔵田屋清右衛門」と印刷されているのに対し、②にはそのどちらもない。また、②には、①にはない序文が一丁分付いているのが大きな違いである。あとは、内容は勿論、形態上もほと

んど違いはない。

ここで問題なのが②の序文である。漢文で書かれたその序文の最後には「明治庚午仲春 共立学同社吉田賢輔撰」とある。共立学同社とは、明治三年（一八七〇）に旧幕臣の英学者尺振八（一八三九

（八六）が東京本所区相生町に設立した私塾共立学舎のことであり、吉田賢輔（一八三七〜九三）は、やはり旧幕臣の英学者で共立学舎の教師である。共立学舎も吉田賢輔も沼津兵学校とは直接の関係はないはずであるが、旧幕臣という

点で静岡藩の沼津兵学校と何らかのつながりがあったのかもしれない。『智環啓蒙』は、その関係から、沼津兵学校・共立学舎共用の教科書として刊行されたと考えられることもできる。尺は後に「浜松県士族」と称しているのので、当時東京にありながら静岡藩士だったのかもしれない。

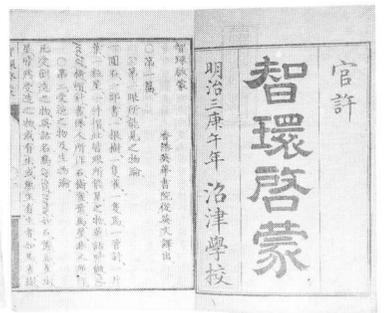


尺振八 (永井菊枝氏提供)

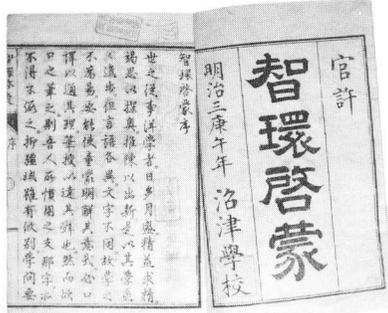
共立学舎は、明治十三年（一八八〇）までしか存続しなかったが、慶応義塾や同人社にも並び称された英学塾だった。田口卯吉は沼津兵学校で学んだ後上京し、共立学舎に入った。また、静岡藩軍事掛附属として沼津に在勤した須藤時一郎も後に共立学舎で教鞭をとり、尺との共著で『傍訓英語韵礎』（明治五年）を刊行した。

尺振八は明治五年（一八七二）から大蔵省翻訳局長をつとめるが（吉田賢輔も副局長となる）、同局にも乙骨太郎乙・島田三郎・田口卯吉・望月二郎ら沼津兵学校出身者が集まった。

また、島田・田口・須藤・波多野伝三郎など、尺振八や沼津兵学校・共立学舎をめぐる人々の中からは、沼間守一（須藤時一郎の弟）がつくった民権結社嚶鳴社に参加する者が少なくなかった。



① 沼津学校刊『智環啓蒙』



② 沼津学校刊・吉田賢輔序文『智環啓蒙』

お知らせ欄

◎企画展「おかしなピラ・チラシ
—紙面にみる昭和世相史—」
を開催中

昨年12月20日より今年2月27日
まで、昭和戦前期の商店・映画館・
役所などのピラ・チラシを集めた
展示会を開催しています。普段何
気なく目にしてはいるピラやチラシ
も時間がたてば当時の時代や世相
を反映する歴史資料となります。
昭和が終った現在、この展示会を
通じてもう一度昭和史を振り返っ
てみてはいかがでしょうか。



◎沼津市明治史料館通信のハツク
ナンバーが20号になりました。

通巻第1号 (85・4・25)
江1 発見! 江原素六のチョンマゲ

姿!?

兵1 まぼろしの静岡藩海軍学校と

『蒸気器械書』の謎

通巻第2号 (85・7・25)

兵1 慶応三年「ええじゃないか」

「お札降り」騒動

兵2 外国人の見た沼津兵学校—

The Far East より—

江2 洋学の師・近藤真琴のこと

通巻第3号 (85・10・25)

江3 両総戦争

通巻第4号 (86・1・25)

兵3 沼津兵学校の同窓会

兵3 沼津藩出身明治人物小伝

通巻第5号 (86・4・25)

江4 明治四年の十三大藩海外視察

団

兵4 幕末維新の遣外使節・留学生
と沼津兵学校の人脈

通巻第6号 (86・7・25)

兵5 沼津兵学校と数学

兵4 名主・庄屋から戸長へ—戸籍
法による最初の戸長—

通巻第7号 (86・10・25)

兵6 幕府陸軍と沼津兵学校

兵5 史料紹介 内浦盟社社則—文
明開化期の村落における学習結

社—

通巻第8号 (87・1・25)

江5 積信社

兵7 御貸人

通巻第9号 (87・4・25)

江6 川村清雄

兵8 沼津兵学校をめぐる画人たち

通巻第10号 (87・7・25)

兵6 史料紹介 興地航海図の訳者
武田簡吾の手紙

兵9 新発見の沼津兵学校旧蔵書

通巻第11号 (87・10・25)

兵10 沼津兵学校附属小学校の女子
教育とその教員

兵7 沼津移住旧幕臣の著名人—沼
津にいた意外な人々—

通巻第12号 (88・1・25)

兵11 沼津兵学校生徒の進学先

江7 「富陽製紙会社」設立計画

通巻第13号 (88・4・25)

兵12 清野勉—論理学の大成者—

江8 静岡県令大迫貞清の紹介状

通巻第14号 (88・7・25)

兵13 戊辰戦争と沼津兵学校の群像

兵9 和田伝太郎と性理学

通巻第15号 (88・10・25)

兵10 山中笑・大橋兼久・若林好徳

兵14 陸軍沼津出張兵学寮

通巻第16号 (89・1・25)

兵11 西間門長倉家と心学

兵15 天朝御雇

江9 江原素六と島田三郎

通巻第17号 (89・4・25)

兵16 横浜語学所の出身者

江10 弟・江原義次

兵12 明治の南洋探検家鈴木経勲

通巻第18号 (89・7・25)

兵17 福井藩からの留学生

兵13 杉山輯吉—沼津藩出身の工部
大学校第一期生—

通巻第19号 (89・10・25)

兵18 海軍・海軍関係の人びと

通巻第20号 (90・1・25)

江11 江原素六と牧畜

兵19 沼津兵学校と共立学舎

江は「江原素六とその周辺」、兵

は「シリーズ沼津兵学校とその人

材」、兵は「ぬまづ近代史点描」

の各シリーズ名の省略です。

沼津市明治史料館通信 第20号

編集 沼津市明治史料館
発行

〒410 沼津市西熊堂372—1

☎〇五五九(23)三三三五